

氏 名	はやし のり ひこ 林 範 彦
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 396 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	チノ語悠楽方言の記述的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 吉 田 豊	教 授 田 窪 行 則	教 授 吉 田 和 彦
--------	--------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は中国雲南省景洪市で話されるチベット・ビルマ (Tibeto-Burman, TB) 語派ロロ・ビルマ (Lolo-Burmese, LB) 語支に属する言語であるチノ語悠楽方言を、現地調査によって採集したデータに基づき、共時的に記述し、その言語特徴を近隣で話される言語と類型的に対照したものである。現在に至るまで、チノ語を共時的かつ全体的に記述したものは、論者のものを除けば、蓋興之の『基諾語簡誌』(1986年、民族出版社)のみである。この『基諾語簡誌』はチノ語の全体像を記したものとしては画期的なものであったが、個々の言語事実、とりわけ文法の問題については不明な点も多かった。本論文は現時点でチノ語の全貌を最も詳細に記述し、その共時的体系の特徴を明確に論じた研究である。

全体は大きく2部構成となっており、それに付録を付している。以下に論文の構成と各章の内容をまとめる。

最初に序章「はじめに」を置き、チノ族およびチノ語に関する情報をまとめた。チノ族に関する歴史的な記述は清代に遡り、20世紀に入るまできわめて素朴な焼畑農耕を営んでいた。現在では焼畑を営んでいないが、基本的な生業としてゴム・茶などの生産が挙げられる。このほかチノ族の衣食住や結婚・祭礼に関する情報も整理してある。チノ語は悠楽方言と補遠方言の2種に大きく分かれる。悠楽方言は村落中心部および若年層になるほど使用されなくなり、また漢語方言とのコードスウィッチングも頻繁であることが指摘されている。

続く「チノ語文法の共時的記述」と題する第Ⅰ部では、チノ語悠楽方言の共時的体系を音韻・形態統語論の各側面から7章に分けて記述した。各章について内容を要約する。

第1章は「音論」と題して、チノ語の音声・音韻を記述した。チノ語の音節構造はCCVV(V)C/Tと模式化できる(Cは子音、Vは母音、Tは声調を示す)。本章では子音・母音・声調の各部に分けて記述する。

まず子音音素としては33個を認めている。破裂音・破擦音については無声無気音：無声有気音の対立があるが、有声音はない。一方、鼻音・流音・摩擦音については無声音：有声音の対立が存在する。第2番目の位置(すなわち介音)に入りうる子音は-r-, -j-の2種類で、前者は両唇破裂音・両唇鼻音・軟口蓋破裂音の頭子音と、後者は両唇破裂音・両唇鼻音・歯茎破裂音・有声側面音・軟口蓋破裂音の頭子音と結合する。母音音素としては前舌母音5個、後舌母音7個の合計12個が確認できる。二重母音は上昇二重母音に2種、下降二重母音に4種、三重母音は1種存在する。声調素には/55, 44, 33, 35, 42/の5種が区別されている。声調交替は非常に複雑で、大きく音韻の動機付けによる声調交替と文法範疇に特有な声調交替に分かれる。形容詞と動詞については、活用や他の要素との結合に際してどのような声調の交替を示すかが克明に記述されている。

第2章は「語構成」と題して、チノ語の語構成に用いられる手法をまとめている。派生は接頭辞によるもの、接尾辞によるもの、および重複によるものの3種のタイプが認められる。接頭辞ないし接尾辞による派生では基本的に動詞から名詞、もしくは名詞から名詞を派生するものが多い。重複による派生は名詞・形容詞・動詞に見られるが、特に名詞と形容詞に広く見られる。複合は[名詞+名詞], [形容詞+形容詞], [名詞+動詞]の3種類のパターンが見られる。

第3章は「名詞句」と題して、チノ語の名詞句構造を記述している。名詞句は[指示詞 - 名詞 - 数量詞句 - 後置詞]の4部分からなり、各要素が順に記述される。

「指示詞」は近称・遠称1類・遠称2類の3種に主に分かれる。それぞれの指示詞は主格と斜格の2種の格をもっており、前者は主に主語になった場合に、後者は主に目的語あるいは場所を表すときに用いられる。「名詞」は[名詞 - 名詞接尾辞]の構造をもつ。名詞には2音節語が最も多い。また名詞は統語的には主語・目的語・コピュラ文の補語の位置に生起する。代名詞は1人称・2人称・3人称および単数・双数・複数の区分をもつ。1人称複数においては包括形と除外形の区別がある。基本的に主格と斜格の各体系を持っている。

名詞接尾辞は「複数」、「～ごと」、「～ように」、「～くらい」の意味を持つ4種類がある。「数量詞句」は[数詞 - 類別詞]の構造をもつ。数詞は基数と序数に分かれるが、基数にチノ語の固有語を用い、序数に漢語からの借用語を用いる。また類別詞は大きく「名詞類別詞」と「回数詞」に分類できる。後置詞は「話題」、「所有」、「場所、方向、対格、与格」、「手段、道具」、「並列、奪格」、「同等比較」、「共格」、「要約、説明」、「列挙」の意味を担う9種類が認められる。

第4章「動詞複合形式」では、チノ語の動詞語根とその周辺に前接・後接する接辞類・助詞類を記述した。また、動詞複合形式に生起する後置詞（前倚辞と考えられる）の各用法についても記述した。名詞についた後置詞のうち、一部は動詞とともに使われ、話題の後置詞は条件などの文、所有後置詞は話者の判断や推測、要約の後置詞は仮定や原因・理由の従属節などに生起する。

第5章は「その他の範疇」と題して、チノ語の形容詞、副詞、疑問語、接続詞、感嘆詞、擬態語等について記述した。形容詞は動詞語根に名詞化接頭辞を付加した形式を基本形とする。活用では名詞と動詞とやや異なる手法をとる。否定形は基本形から接頭辞を脱落させ、否定接頭辞を付加する。また重複は非常に生産的であり、語根部分を完全重複する手法と語根の母音を重複し、頭子音として1-を置く手法がある。統語的には修飾用法と叙述用法の2種類に大別できる。修飾用法は名詞修飾と動詞修飾の2種に分かれる。名詞修飾では名詞に形容詞を後置させるが、動詞修飾では動詞に対して形容詞を前置させ、様態副詞的な意味で動詞を修飾する。叙述用法も名詞修飾用法と同じく表面的には名詞に形容詞を後置させている。そのため両用法において構造的あいまい性が生じる場合があるが、そのあいまい性を回避するために叙述用法ではコピュラ動詞を用いることがある。

副詞は様態副詞、時間副詞、場所副詞の3種に大別できる。様態副詞は漢語からの借用語を含めれば相当数に上ると考えられるが、固有語に限れば少数の語が動詞の前に置かれて動詞を修飾する。時間副詞は元来時間を表す名詞が派生を経ずに副詞として転成したと考えられる。場所副詞も時間副詞と同様、場所を表す名詞句が後置詞を伴わず、動詞の項構造に組み込まれない場合で、開かれた集合をなす。疑問語は大きく疑問代名詞と疑問副詞に分かれる。接続詞は通常文頭に生起し、直前の文ないし節との関係を表す。

第6章「文末および節末を表す範疇」では、文終止助詞、モーダル助詞、接続助詞の記述を行った。文末では[文 - 文終止助詞 - モーダル助詞]の順序で助詞が置かれる。文終止助詞の位置には「陳述文」「真偽疑問文」「真偽疑問文・疑問語疑問文」「詠嘆・確認」を表す助詞が入り、文が終止していることを明示する助詞を置く。文終止助詞の後ろの位置には「確認」「自問」「勧告」「軽い命令」「発話の正当性」「語調を整える機能」を表すモーダル助詞が生起する。節末には接続助詞が置かれ、従属節の境界を標示する。「継起」「原因・理由」「仮定1」「仮定2」「時」「逆接」を表す接続助詞が生起する。

第7章は「文法現象における諸問題」と題して、チノ語文法における諸現象のうち特筆すべき問題を論じた。これは本論文の中では最もユニークな部分であり、個別語の記述に一般言語学的な視点を導入しようとする野心的な試みでもある。「語順と情報構造」、「名詞修飾」、「名詞述語文/動詞述語文」、「コピュラ動詞の用法」、「疑問表現」、「使役構文」、「動詞連続構造」、「複文」などについて取り上げて記述している。

語順に関してはチノ語は無標のときSOVの語順を持つ。またOが有生名詞であれば後置詞を置くことがある。名詞修飾において形容詞は主名詞に後置されるが、関係節は主名詞に前置されることも後置されることもある。一方で、文法関係の解釈には、文脈からの情報や、文を構成する項目の語用論的な顕著性が関与する。語用論的に顕著な項目であれば、たとえばOがSに先行することが許され、後置詞による格標示も義務的ではない。また文の中では重要度の低いものから高いものへ情報が流れるため、SOV型の言語の一般的な特性に反して関係節が主名詞に対して後置された場合、主名詞よりも関

係節のほうが重要性の高い情報量をもつと考えられる。

チノ語には大きく分類して名詞述語文と動詞述語文の二つがある。名詞述語文には名詞を並列する等位文のみならず、動詞複合形式に名詞化接辞が付加された場合も含められる。後者の名詞述語文と本来の動詞述語文は機能面で違いがないように見えるが、二つは対応する疑問表現に変換する場合、疑問文末助詞として選ばれる形式が異なることが指摘される。ある種の疑問文末助詞はその両者に附加できるが、動詞述語文としか生起できない助詞も存在する。

コピュラ動詞は基本的に等位文に現れるが、必ずしも義務的ではない。しかし名詞を並列するだけでは表現できない意味を表す場合、すなわちテンス・アスペクト・モダリティーを持った等位文は義務的に用いられる。また義務・疑問・推測などのモダリティーを文内に導入する装置として機能することも多い。

使役構文は動詞に5種類の接辞を付加する場合と、「言う」を意味する動詞を用いる場合に分けられる。1種類を除いてすべて間接使役を示すが、その使役の強制度には階層が存在し区別されている。

動詞連続構造は基本的に verb concatenation (動詞語根を並列する構造) のタイプのみが認められる。隣接する2個の動詞を取り上げれば、自動詞 = 自動詞, 自動詞 = 他動詞, 他動詞 = 他動詞, 他動詞 = 自動詞の4タイプが存在するが、その多くには動詞の要求する項を併合する現象が見られる。

複文は従属節が補文である場合とそうでない場合に分けられる。前者は主節動詞の種類により、主節動詞に対して補文が先行する場合と後置される場合の2種ある。一方、後者は基本的に従属節が主節動詞に対して先行する。

第Ⅱ部は「周辺諸言語との対照」と題して、第Ⅰ部で記述したチノ語文法の各特徴を、周辺諸言語、とりわけチベット・ビルマ諸語やロロ・ビルマ諸語と対照している。第8章では音韻について、第9章では形態統語論について扱われている。以下、各章について要旨を述べる。

第8章は「音韻面における類型的特点」と題して、チノ語の音韻体系を周辺で話されるロロ・ビルマ諸語を中心に対照する。まず、頭子音体系から見ると、チノ語はアチャン語・ビルマ文語などのビルマ系言語の体系に典型的に近い。更に、介子音においてチノ語には -r-, -j- の2種類が存在しビルマ文語と類似する。更にチノ語の単純母音は緊喉母音を持たない点で、アチャン語・ビルマ口語と近似している。しかし、チノ語の単純母音はロロ系同様、比較的特異な配置となっている。またチノ語の二重母音は下降二重母音が上昇二重母音に比べて多い点で、ビルマ系と共通の特徴を持っている。更に末子音に関しては、チノ語は鼻音末子音を持っている点でビルマ系と類似している。声調に関してチノ語はロロ・ビルマ諸語内では相対的に多い対立数を持っているが、声調交替も多い。チノ語の声調交替は音節声調型から語声調型に移行しているともみなせるが、この移行は他のロロ・ビルマ諸語にも見られる比較的一般的なものであるとする。

第9章は「形態統語的側面における類型的特点」と題して、チノ語文法に見られる諸現象を周辺で話されるチベット・ビルマ諸語を中心に対照する。全体として見ると、チノ語の形態統語論的性格がある特定の言語に最も近いと言うことはできない。しかし、チノ語の名詞の語構成および代名詞の格体系、否定表現・使役表現はハニ語と共通した特徴を多く持っているとする。

チノ語の動詞は膠着性の高い複合形式を通常伴うが、この点は、同系統に属するロロ・ビルマ諸語ではビルマ口語にしか認めることができない。また動詞複合形式の膠着性の高さは地理的にはやや離れるものの、チアン語北部方言と近似しているとも指摘される。チノ語の名詞化接辞の特徴などは、ネパールで話されるベルハレ語に近く、重複の点ではサンコン語ときわめて類似していることも指摘している。

最後に付録として基礎語彙を掲げる。ここには約600語が意味の分野別に配列され、中国語と英語の意味も与えられている。収録された語彙のうち特に重要なものについては、関連語彙や補足事項・例文を添えてある。末尾には日本語・英語による索引を付してあり、検索の便宜を図っている。

以上が本論文と付録の要旨である。

論文審査の結果の要旨

チノ語は、中華人民共和国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪市に居住し、チノ(基諾)と自称する民族によって話されている。この言語はシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語支に属し、その中でもロロ語群に属すると

一般には考えられている。2000年現在、20000人ほどの話者がいると報告されている。本論文で扱われるチノ語悠楽方言は、チノ語に確認される2つの方言のうち話者が多いほうの方言で、9割近くがこの方言の話者である。本論文は、論者が2000年7月から2006年7月までに11回に及ぶ現地調査を行って収集したデータに基づいている。その間2005年から2006年にかけては雲南民族大学の訪問学者として現地に腰を据えて調査に当たった。

チノ語はいわゆる少数民族言語で、1970年代の後半になってようやくその存在が知られるようになった。そして1981年に蓋興之による短い報告が発表されるや、ビルマ系とロロ系の言語の関係を考える上で重要な性質を有するチノ語の系統上の帰属の問題が、学界で注目されることとなった。しかし一個の言語としてのチノ語の文法全体について概況がつかめるようになったのは、1986年に同じく蓋興之が『基諾語簡志』を刊行してからであった。一方でこの簡単な記述以降はまとまった報告は発表されておらず、チベット・ビルマ系の言語の研究者が信頼して利用できる詳しい記述という見地からは、蓋興之のデータの検証も含めて、不十分な状態が続いていた。従って論者が長期にわたる現地調査に基づき、チノ語の音韻、文法、語彙を詳しく記述しただけでなく、周辺に存在する同系の言語との類型的な比較・対照を行って、チノ語を真に総合的に分析しその成果をまとめたことはこの分野に対する大きな貢献である。

論文全体は、チノ語の記述言語学的研究に当てられた第Ⅰ部と、周辺言語との対照を扱う第Ⅱ部から成り立っている。別に付録としてチノ語悠楽方言の分類語彙集が添えられる。この語彙集は、非常に行き届いた配慮のもとに作成されており、単に語彙を意味分野で分類して提示するだけでなく、重要な語には用法や例文を添えるなどの工夫をし、各語には日本語、中国語、英語の意味を与えるとともに、日本語と英語による索引も添えられている。

序章では、はじめにチノ語とチノ族にかかわる現在の状況や知られている歴史をまとめている。ここにはチノ語話者の二言語使用の実体や、若年層では使用されなくなっている状況など社会言語学的な情報も含められている。

序章の後に続く第Ⅰ部は、全7章からなっている。第Ⅰ部の高く評価される特徴は、音韻分析や形態論・統語論のすべての部分で、論者による緻密な分析の結果が網羅的かつ体系的に提示されていることである。そのことがよく現れているのは、非常に複雑な交替を示すチノ語の声調の分析であり、音韻的に動機づけられた交替と形態的に動機づけられた交替に分類するとともに、交替のパターンを包括的に示すことができた。また論者が動詞複合形式と呼ぶ動詞の活用を扱う第4章では、動詞語根をはさんで生起する派生と屈折にかかわる14種類にも及ぶ拘束形態素を認め、それらの生起するスロットと各スロットに生起する形態素の種類・機能・意味を克明に記述する。第Ⅰ部の最後に置かれ、「文法現象における諸問題」と題された第7章は、論者の長期間にわたる現地調査に裏打ちされたチノ語の文構造に対する深い洞察と豊富な知識が発揮されている部分で、情報構造と語順の関係や、一見して同じ機能を有すると思われる構文の用法上の違いが克明に分析されている。これは本論文の中では最もユニークな部分であり、個別語の記述に一般言語学的な視点を導入しようとする野心的な試みでもある。例えば使役を表す形式には6種類が認められるが、各形式が使役の強制の度合いとの関連で使い分けられていることが明らかにされる。

第Ⅱ部は、系統的な見地ではなく、類型論的な見地に立って音韻面と形態統語面から、チノ語を周辺に存在するロロ・ビルマ系の言語と比較対照している。その結果まず音韻面では、例えば緊喉母音を持たないなど、ロロ系の言語よりもビルマ系の言語に近い特徴を示すことがあることが指摘されている。形態統語面では、動詞複合形式の膠着性の高さは、四川省で話されるチベット・ビルマ語派チアン語群のチアン語北部方言に近く、語構成、代名詞の格体系、否定・使役表現ではロロ系のハニ語と類似するなど、総体としてチノ語に近い言語を見つけることはできないことが指摘されている。また、名詞化、関係節化、補文標識など複数の統語的機能をあわせもつチノ語の形態素との比較では、東アジアから東南アジアにかけて分布する諸言語に、形式は異なるものの、類似の機能を有する形式が生起しているという興味深い事実を指摘し、言語間の相違を分析するとともに、統一的な説明の可能性をさぐっている。第Ⅱ部の議論は、論者がロロ・ビルマ系に限らず、東アジアから東南アジアにかけて分布する言語の中にチノ語を位置づけ、広い見地に立って研究していることと、それを遂行する知識を十分に備えていることをよく示している。

以上述べたことから明らかなように、論者は本論文において現在まで十全な記述が為されていなかったチノ語に関する真に総合的な記述を行った。レファランス文法の性格を備えたその文法記述は、付録の語彙とともに、今後この分野の必須の資料としてながく利用されるであろう。

しかし、本論文に批判すべき点が全くないわけではない。体系性や網羅性を追求するあまり、多数の小項目や小節が設けられたり、周辺の部分から記述が始まるなどしてかえって全体像が見えにくくなっている部分がある。また付録の語彙には、論者が把握している語彙のごく一部しか収録されていない点などは惜しまれる。しかしそれらの問題点の解決は、本論文を刊行する段階で改善することが可能であり、本論文そのものの価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。